

福山市立女短大

○増田智恵 増田茅子

目的 スタンドカラーを着用して頸部に不快感を与えないということは、頸部の動きに対してスタンドカラーの構成に適当なゆとりが含まれている場合と考える。スタンドカラーの構成基準線である衿付線の形状とゆとりについて実験を行ったので報告する。

方法 被験者は平均年齢19.5才女子学生7名である。頸部形状把握のため頸付根線を基準に頸部表面にそって上方に1.0 cm間隔の平行線を3 cm上部まで描いた。各線を l_1 (頸付根線) l_2, l_3, l_4 とする。頸部の動作は、立位正常姿勢で静立位(耳眼水平位)と、前・後屈, 左・右屈, 左・右回旋の7動作である。各動作時の頸部を石膏で採取し、平面展開図を作成した。この展開図の $l_1 \sim l_4$ にはグッシユをつけて区別する。

結果 静立位での人体計測 l_1, l_4 および平面展開図 l'_1, l'_4 各の左右差は認められなかった。しかし l_4 と l'_4 間には有意差が認められその差の平均は前後とも約0.61 cmである。静立位の l_1 と各動作の l'_1 の後には差はないが、前には右回旋の右; 左回旋の左に有意差が認められた。その差の平均は0.70~0.91 cmである。静立位の l_4 と各動作の l'_4 の前後ともに有意差が認められた。その差の最大は後では右回旋時の右で平均0.8 cm左で0.78 cm, 前では右回旋時の右で平均1.28 cm, 左回旋時の左で1.30 cmである。このような結果はスタンドカラーの衿付線の立ち上りの形状と関係があり、衿付線の形状とゆとりとの関係を示唆するものと考えられる。

本研究は衣服研究振興会の助成による研究の一部であることを明示し謝意を表します。